

たぐみ

Craftsmanship

特集 たぐみアーカイブス
特集 春の蔵出し市

第56号

社会の中の民藝運動

第二次世界大戦、あの痛ましい戦争が日本の降伏によって終結してから足かけ七十年になる。私は終戦の年の九月、集団疎開先の学園の農場から帰京のさい、焼け野原の池袋駅でバラック造りの武蔵野百貨店(今の西武)を見つけ入ってみた。そこで学童用のノート、鉛筆があるのを見て何かホツとした気持ちになったことを覚えている。

しかし教科書はそれから二、三年は、ザラ紙の間に合せであった。そんなことを書くのは、それでも当時決して不幸せではなかったからである。食べるものは之しくとも、もう爆弾が落ちない、家族皆が平和に暮せるという解放感は、子供心に明るいものがあつた。その後朝鮮戦争やベトナム戦争があつても、それは大戦の戦後処理であつて、これからは国家間の確執も民族紛争も、国際的な協議や援助、そして譲り合いという理性的な行動によつ

て解決への方向に進むであろうと思つていた。それがそうでもないのである。

世界や国内が同じように混沌とした昭和の初め、柳宗悦が論稿「工藝の道」を書き、同志たちと「日本民藝美術館設立趣意書」を発表して民藝運動が始められた。

弱肉強食をよしとする社会風潮にあきたらず、社会の公正と多様性と、柳の明らかにした「当たり前で日常的な暮らしの中に、真実の美がある」という真理に目覚めた多くの青年、工人たちが柳の運動に参加してきた。

この運動が社会の目覚め、そして変革に与えた影響は大きい。しかしこんにち民藝運動が、社会のさらなる激動のなかで何をなすべきか。柳宗悦ならばどう思索し、いかに行動したか、私はいつも考えるのである。答えはいつも出ない。仮説ではなく、いまの自分の行動がその答えでなければならぬのであろう。

(志賀直邦)

たくサアーカイブス(二〇) アメリカ通信

柳 宗悦

去る十月八日、大西洋を飛行機で飛んで無事ニューヨークに着きました。日々非常に忙しくてろくに手紙を書く暇もなく方々へ失礼しています。諸兄からのお便り何れも嬉しく拝見しました。不在中きつと色々の事でお厄介をかけているに違いなくふかく感謝します。

浜田とリーチとの協同展（ロンドン）はたいへん盛会で、吾々が去る迄に何れも四分の三は売れていましたから、あとで又売れた事と思います。十五個の民窯は何れもすぐ売れて好評でした。それにつれても「たくみ」の海外進出は非常に希望があるわけで、何とか大きな方針を立てるべきと思います。

ニューヨークの「工芸」という店は大変美しい店でした。品物さえ充実したら、益々好評を得るでしょう。ニューヨークに着いて早速新作工芸を見る機会がありました。手工芸の方は欧州に比べ、大変見劣りがして、買いたい

のがありませんでした。陶器などまだ素人くさいものばかりです。併し機械製品の方には何か見つかるといいでしょう。

米国では之から約三カ月暮れますが、大部分が講演旅行のため、余り方々を見て廻る暇がないかをおそれます。只メキシコでは凡ての時間が自由なので、大いに物を見つけ出せるかと思えます。ここで又米国での収入の殆ど全部を空にする事でしょう。

東京では間もなく沖繩展がある事と思えます。見られないのは残念です。何か良い品があったら民芸館のため、とつておいて下さい。

昨夜この学校で沖繩の映画と幻燈の会をしました。皆に大変喜ばれました。今度の旅ではフィルムとスライドはど

たくサアーカイブス(二十一)

国際工藝家会議と柳、浜田両先生 村岡景夫

去る七月十七日から二十七日までイギリスのデボンシャー州にあるダーティントン・ホールで開かれた第一回国際工藝家会議に東洋から招かれた唯二人の代表として柳、浜田

こでも圧倒的人気で、此の方では他の工芸品も写しておくべきだと思います。

欧州でも米国でも日本の工芸の実状は全く知られていないと云つてよいのです。同じ様に海外に出てみると東洋の思想が大いにものを云うことがわかりました。恐らく西洋の文化と充分太刀打ち出来るのは、佛教思想だけかと思われず。今迄西洋で考えられていない数々の思想が、異常な関心を起させるのです。吾々は外国に来て、東洋人である事を感じないわけにはゆきませんでした。

諸兄の健在をいのる。

十月十八日

(一九五二年十二月十五日刊「月刊たくみ」No.3より)

ナード・リーチに再会、相たづさえて国際会議に出席されました。

この会議は陶器と染織との二部門に關する凡そ二十ヶ国近くから集まつた学者、評論家、美術館員、指導員、工芸関係の実業家達百五十人近くの参加者があり、そのうち陶工が四十人近くあつたそうです。地元の英国人が一番多く、次は米国人で、ドイツからも相当に出席者があり、欧州のほとんど全国から集まつてきたのに東洋から招かれたのは柳、浜田両先生だけだつたそうです。

もともとこの会議は日本になじみの深いパーナード・リーチ氏が中心になつて開かれたものなのですが、リーチ氏は先年「陶工の本」を著わして以来、陶工として今欧米で知らぬ人のない程著名であり、欧米の工芸界に大きな影響を与えている人で、恐らく中リアム・モリス以来の大きな存在であると言われております。

このリーチを通じて柳、浜田両先生は既にしばしば欧米人の間に紹介されていたので今度の会議に集まつた人達

は皆互いに旧知の様な思いがしたそうです。その上浜田先生のロクロや絵付けの実演は皆から驚きを以て見られ、柳先生の数回の講演はその東洋的な佛教的な考え方が、西洋的な考え方になれている人々に、大きな問題を投げかけたようです。

リーチ氏は今度の会議への両先生の出席によつて、吾々西洋人が「東洋の内からの声」を直下に聞く機会が始めて与えられ、その驚異の気持ち十日間の会議中打ち続いたと感激の言葉を送つてきております。そのうゑに民芸館の蒐集品を撮つた三百枚のカラー・スライドと「日本の陶磁器」と云う映画とは非常な感興を呼び、数回映写することを求められたそうです。

戦後世界の各地で国際的な諸種の会議が幾度か開かれました。しかし今度の会議のように日本の代表、日本の文化が会議を主導し、感激と畏敬とで迎えられたことは恐らく未だなかつたことでしょう。両先生の御努力を多すると同時に、今ようやく半ば終つた今度の旅程の前途に更に大きな期待がかかる

けられております。
 (一九五二年十月十五日刊「月刊たくみ」No.1より)

合本「たくみ」発行のご案内



平成十四年十一月、たくみ創立七十年を期して発行いたしました小冊子『たくみ』一号から五十号までを、このたび二冊に合本し販売いたします。第一集、第二集とも各一冊千円でございます。銀座の「たくみ本店、駒場の日本民藝館売店」でとり扱っております。

たくみ特別展 「春の蔵出し市」

会期 平成二十六年四月二十六日(土)～五月二日(金)

四月二十七日(日)、二十九日(火・祝)は営業いたしません。

会場 銀座たくみ二階ギャラリー

営業時間 十一時～十九時(日・祝日、最終日は十七時半まで)



1 掛分火鉢 (浜田庄司)



3 石像 (韓国)



2 三番叟 (三春張子)



4 三彩ピッチャー (佐久間窯)

出品品目

●陶器

浜田庄司、佐久間藤太郎、島岡達三、金城次郎、益子ほか日本の民窯、中国、韓国、ペルーなど

●染織

柚木沙弥郎、四本貴資、鳥取木綿、庄内の小幡帯地など

●木工・雑工

ガラス器、曲げわっぱ、こね鉢、韓国の一閑張、海洲盤(角膳)など

●玩具

古作三春張子、山形さがら人形、沖繩張子、下河原人形、長野松本の木製面、山形笹野彫、久米土人形、八橋人形、こけし。韓国、トルコ、チベット、ペルー、アフリカなど諸外国の玩具



11 木製虎（中国）



8 六角花瓶（佐久間藤太郎）



5 流掛小壺（堤焼）



12 ちゃぐちゃぐ馬（岩手県）



9 釘彫かめ（苗代川焼）



6 菊文大皿（佐久間藤太郎）



13 親子（八橋人形）



10 行灯皿（瀬戸焼）



7 笹絵徳利（瀬戸焼）



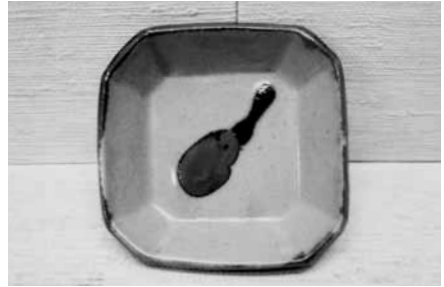
18 ぐい呑、徳利、とんすい（佐久間窯）



14 飯碗（佐久間窯）



19 柿釉コーヒー碗皿（佐久間藤太郎）



15 隅切なす絵皿（佐久間藤太郎）



20 扁壺2種（佐久間藤太郎）



16 びわ絵片口（佐久間窯）



21 ティーポット2種（佐久間窯）



17 柿釉特大灰落（佐久間藤太郎）



28 水注 (佐久間孝雄)



25 黒釉線彫角瓶 (佐久間藤太郎)



22 松絵尺皿 (佐久間賢司)



29 三彩抜絵壺 (佐久間藤太郎)



26 三彩流掛大皿 (佐久間藤太郎)



23 三彩火鉢 (佐久間藤太郎)



30 打掛花瓶 (佐久間藤太郎)



27 焼ノ花瓶 (佐久間藤太郎)



24 五寸蓋物 (佐久間窯)



35 おしくら（さがら人形）



31 絵馬



36 象乗り唐児（三春人形）



32 八寸ひあげ（東北地方）



37 花巻黄金牛（岩手県）



33 小幅帯3種（庄内地方）



38 黒馬土鈴（奈良県）



34 コンロ（秋田県）



47 大黒（埴土人形）



43 腹出し（三春張子）



39 羯鼓（三春張子）



48 竹田の女達磨（大分県）



44 錦祥女（三春張子）



40 狐の嫁入り（土人形）



49 狐義太夫（赤坂土人形）



45 唐人形（三春張子）



41 天神（三春張子）



50 太鼓打ち（下河原土人形）



46 ひょうたん抱き（さがら人形）



42 鯛乗りえびす（香川県）

たくみ歳時記

天然素材の編組品

近頃、山ブドウの手提げが人気で、中国産のものも日本で増えています。

作りはともかく、材料が薄いので折れやすく、色艶も出てこないようです。

たくみでは様々な植物で編まれた籠や箆を扱っていますが、昔からそれぞれ山の自生し、農閑期に生活道具として作られてきたものです。

やはり日本の風土で育ったものが湿度にも耐え、長持ちするのでしよう。

使うほどにしなやかに丈夫になりますので、もったいないと仕舞いこまずに、じっくりと育てていただきたいと思えます。

(KS)



前列左から山ブドウ手提げ（青森）、山ブドウ背負い籠（福島）、スズ竹手提げ（岩手）、左奥はマタタビ平箆（福島）

あとがき

このたびの「春の蔵出し市」のご案内をしましょう。永年のお得意様をご所蔵の民藝の品々、昔むかしの海外旅行で手に入れた今では現地にも無い珍品、郷土玩具で知られたふるさとの、かなり前の張り子人形や土人形など。

また若い頃から好きで窯にもかよって集めた、益子の佐久間藤太郎窯の三代の方の陶器など、縁あってたくみでお預かりした品々です。個人の方のそれぞれの思い入れがあつて、歴史や物語りまで感じとれるのです。

民藝品は使ってこそ愛着が出るものです。また同じ産地の品でも、時代によって味わいや表情がちがうのも面白いものです。お楽しみ下さい。

(S)

発行 株式会社たくみ

東京都中央区銀座八一四一二

発行責任者 志賀直邦

電話 〇三―三五七―二〇一七

FAX 〇三―三五七―二一六九

振替 〇〇―一〇―二二三五六五九

定価 六〇円（税込）